

平成30年度特別展

## 福井震災70年 — 記録と記憶を未来へつなぐ —

昭和23年(1948)、6月28日、17時13分すぎ(サマータイム。標準時では16時13分)に福井県北部、丸岡町付近を震源に発生した福井地震。当時の震度としては最大の震度6の大地震であり、地震後の火災や水害も含めて大きな被害をもたらしました。被害地域は福井県嶺北地方から石川県南部におよび、死亡者は約3600人、負傷者は16,000人を超え、約46,000件の家屋が全半壊し、3,700件余りが焼失しました(『福井烈震誌』福井市編 1978より)。

平成30年(2018)は、この福井地震から70年という節目の年にあたります。この特別展では、地震とその被害を含めて「福井震災」とし、当館が収集を進めてきた写真資料、文書類を中心として、新出資料を含む多様な資料で、被害・救援・復興をふり返ります。あわせて、記録・記憶の継承のこころみについても紹介します。

### はじめに 戦火からの復興

第二次世界大戦末期、昭和20年(1945)7月19日の深夜、福井市街地上空に米軍の爆撃機B29が100機以上飛来し、10,000発を超える焼夷弾が落とされました。「福井空襲」です。市街地の80%以上が焼野原となり、死者・行方不明者は3,600人に上りました。同年8月15日、日本はポツダム宣言を受諾、9月2日、降伏文書への調印をもって連合軍へ無条件降伏し、第二次世界大戦が終結しました。その後、日本は連合軍の占領下で復興の途を歩みます。福井では、福井市に軍政部が置かれました。そうしたなか、空襲によって



被災後の福井市街(県庁から南を望む)  
『米軍が見た占領下京都の600日』二至村著 藤原書店より

大きな被害を受けつつも、福井市街地の復興は着々と進められ、昭和22年には、空襲被害からの「復興記念祭」が開催されました。福井空襲の被害と市街地の復興について、写真資料などを中心に紹介し、戦後から地震前の福井のようすを概観します。

### 1. 福井地震の発生と被害

空襲の被害から復興を進めていた福井を襲ったのが、昭和23年6月28日の福井地震です。発生時刻は17時13分すぎ(サマータイム。標準時では16時13分)で、学校では児童生徒がほぼ帰宅し、企業では就業時刻が終わろうという時間帯でした。震源は、福井県北部、現在の坂井市丸岡町付近とされます。地震の規模を示すマグニチュードは7.1、震度6の烈震(当時)と記録され、被災地域は北は石川県江沼郡大聖寺町(現 加賀市)周辺から南は福井県今立郡北中山村(当時)におよびました。とくに、空襲から復興しつつあった福井市街地、その北側の吉田郡、坂井郡を中心に大きな被害を受けました。ここでは、被害状況の写真、被害報告、会議の資料などの記録をもとに、地震発生直後の状況をたどります。占領下で発生した地震であったことから福井軍政部が撮影・収集した記録写真が残されており、その多くは米国国立公文書館に収められ、公開されています。いっぽうで、米軍人らが個人的に持ち帰ったものもありました。ここでは、



GHQ関連資料群

近年当館が入手した震災当時、連合軍福井軍政官であったジェームズ・F・ハイランド中佐ゆかりの品を含む、福井軍政部関連の新出資料を展示します。あわせて、石川県南部も視野に入れ、「北陸震災」としての側面にも触れます。

そうした「記録」とともに、地震とその後に続いたさまざまな出来事は、人々の記憶に深く刻まれました。当時を思い出して描かれた絵画、新たに行った聞き取り調査の内容などから、人々の「福井震災」の記憶をたどります。

## 2. 救援と報道

地震発生とともに、被災地からの連絡手段の大部分は断られました。そうしたなか、福井電話局の電話回線やNHK福井放送局の通信機から「福井で大地震があり、被害が甚大である」という情報が各地に伝えられ、各地から福井に向けて救援が送られました。もちろん、福井においても、県、市町村を中心に、被害の調査、救援物資の確認と受入れ、負傷者の救護などの対応が急ぎ行われました。ここでは、救援にかかわる資料、記録写真などから、救援の状況について取り上げます。あわせて、京都軍政部から救援のために福井に入った 그리스マン軍医が撮影した貴重なカラー写真や、復興のようすを家族に知らせた私信などから、外から見た被災地・福井と人々のようすを紹介します。

また、福井での地震について伝える新聞報道をたどります。当初の号外から、続報での被害詳細、救援の記事など、新聞がまだ2ページしかない時代、限られた紙面で震災がどのように報じられたかをご覧ください。



福井地震被害調査票 昭和23年(1948)

## 3. 復興から継承へ

地震発生直後、人々は廃材を利用するなどして仮小屋(バラック)を建て、ともかくも雨露をしのぎました。いっぽうで、被災市町村と県では、町づくりという側面から、復興計画を立てていきました。ここでは、写真や復興地図などで、復興の状況をご紹介します。また、地震の発生と被害、被災者の状況について、多数の調査が行われました。それらの調査は、未来への貴重な記録になっていきました。

そして、震災から4年が経過した昭和27年(1952)4月10日から6月25日の間、空襲と地震の被害からの復興を記念した「福井復興博覧会」が開催されます。現在の福井大学敷地を第1会場、足羽山を第2会場に開催され、福井の地場産業である繊維を全体テーマとしたことから「繊維博」と通称されました。会期中、のべ約80万人が来場する盛況ぶりで、福井の復興を全国にアピールしました。復興博覧会のポスターに使われた東郷青児の油彩画や、博覧会パンフレットなどで当時の賑わいを振り返ります。

華やかな記念行事が終わった後も、震災の記録や記憶は人々の努力によって現代へと受け継がれています。「復興観音」への祈り、各地の記念碑、紙芝居の作成、小学校での郷土学習などに見られる継承の試みを紹介します。

震災から70年を迎える今日、その日の体験を記憶に刻み、語る人たちは少なくなりつつあります。福井震災の記録を振り返り、記録をたどることで、震災を未来へつなげる歴史として受け止めていただければと思います。(瓜生由起)



福井復興博覧会ポスター 昭和26年(1951)  
原画：東郷青児 油彩画 昭和26年(1951)「絹の精」  
(C) Sompo's Museum of Art, 18016

### 特別展「福井震災70年 記録と記憶を未来へつなぐ」

開催期間／平成30年6月28日(木)～8月19日(日) 期間中休館日 7月11日(水)

観覧料：一般400円 大学・高校生300円 小中学生・70歳以上の方200円 ※20名以上の団体は2割引

## 笑草(稿本と版本)

【稿本】 26.5×18.2(cm)

【版本】 22.5×15.6(cm)

安政5年(1858)、江戸幕府徳川將軍の継嗣をめぐつて、大老伊井直弼が一橋派および尊皇攘夷派を弾圧した事件、いわゆる「安政の大獄」で捕えられた三国幽眠(大学)が、京都から江戸へ護送され、収監されるまでの経過を記録した獄中日記です。

刊本は、幽眠の子三国一愨が明治29年(1896)に発行したもので、これまでに刊本と草稿本(福井市立郷土歴史博物館保管)は確認されていましたが、稿本(自筆本)は新たに見つかったものです。

筆者の三国幽眠は、文化7年(1810)、越前三国湊の商人三国与兵衛(鶴叟)の三男として生まれ、20歳の頃、彦根藩中村禄郎の門人となり徂徠学を学びました。ちなみに、同門で机を並べていたのが、のちに幕府大老となる井伊直弼でした。その後、天保3年(1832)に京都にて、折衷学派を学んで梁川星巖や森田節斎らと交流し、同7年には私塾を開き、門弟を養成する傍ら、『古註孝経』などを出版し、同9年には関白の鷹司家の儒官となりました。

そして、將軍継嗣問題が起こると、福井藩士橋本左内らと接触し、関白の鷹司政通・輔熙親子に一橋派に味方するよう画策しました。それがやがて、弾圧の対象となって江戸に送られ入牢しますが、「江戸拾里四方追放」の刑を受け、近江国の石山に逼塞しました。文久2

年(1862)赦免され、京都に戻り、慶応元年(1865)に剃髪して幽眠と号するようになります。さらに、鷹司家の推挙により新政府の御用掛議事局扶となります。この時、由利公正の太政官札発行の建議に際し、岩倉具視からこの是非についての相談を受け、発行は止む無しと答えたといえます。その後、明治6年に教部省大講義となり、同29年87歳で没しました。

本書(稿本)には、安政5年11月13日に幽眠宅に捜索が入り帳簿書類などが押収され、その後、奉行所で尋問を受けたことを冒頭に、江戸への護送中の籠内のようなすや揚げ屋(牢獄)での生活、そして安政6年10月7日に奉行所の裁断を受けるまでを詳細に記録するとともに、その間に詠んだ詩歌が記されています。

また、幽眠とともに捕えられ、牢屋に入れられた池内大学ら9人の牢屋内の位置図、護送中の籠内で紐で縛られ拘束された状況、籠の構造や排便器、江戸での「揚屋」(牢屋敷)の構造と番人の配置図、「憚り」といわれた便所など、詳細な手書きの図が挿入されています。さらに、獄中で無罪となった夢の内容を図に表した「安政六年三月四日早朝霊夢之図」もみられます。本文に加えて、こうした図が多用されており、獄中の労苦をより具体的に読み取ることができます。(山形裕之)



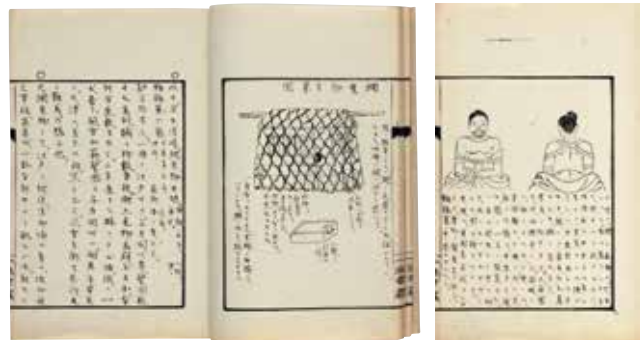
「笑草」(稿本)



「笑草」(刊本)



三国幽眠



「笑草」(稿本) 部分

## イズメ

[法量]	写真1	藁製	径(最大)58.0×高(最大)34.6(cm)
	写真2	木製	径(最大)54.5×高(最大)34.8(cm)
	写真3	木製	径(最大)62.4×高(最大)36.6(cm)
	写真4	竹製	径(最大)60.0×高(最大)43.5(cm)
	写真5	樹皮(樺)製	径(最大)69.2×高(最大)36.5(cm)
	写真6	竹・紙・布製	径(最大)58.0×高(最大)34.8(cm)

イズメとは幼い子を入れておく用具です。全国的にもこうした用具はあり、地域によって、エジコやイズメなどと呼ばれています。福井県内では、嶺北地方ではイズメやイズミ、エズメのほかツグラと呼ばれており、嶺南地方ではフゴと呼ばれていることが多いようです。今回は便宜的にイズメと呼ぶことにします。

今回紹介するのは、当館が所蔵するイズメ6点です。「イズメ」としてよく知られているのは、藁製(写真1)のものかと思われます。この藁を編んで作られたものは、全国的にも広く行き渡っており、こうしたものの代表として紹介されることがあります。

しかし、藁製以外にも、木製の桶(写真2)、木製のものでも八角形に作られたもの(写真3)、そのほかでは、竹製(写真4)のもの、樺の樹皮を使用したもの(写真5)、また竹製の籠に紙や布地を貼ったもの(写真6)などが見られます。県内を見ると嶺北地方では藁製のものが多く使われていたようですが、奥越地方では木製の桶のものも使われ、また、嶺南地方では竹製のものが多くあったようです。

ただ、藁製のものを使用しているといっても、夏には竹製のものを使ったこともあったようで、そこは季節

によって使い分けもあったようです。

さて、このイズメは幼児を入れると言っても、単純に入れるだけではありません。その下に古着や藁、灰などを入れ、さらにゴザや布団を入れて、幼児を固定するように入っていました。これは幼児が動いて、傾かないようにするためです。子が大きくなると、紐を使って縛って、簡単には動けないようにすることもあったようです。こうして中に入れることで、幼児が動き回ることによって発生する事故を防ぐ、例えば囲炉裏などの危険なところへ行ってしまうようにするというのがイズメに入れる目的の一つでもありました。現在でもベビーベッドの中に入れて、柵などを設けたりすることがあるかと思いますが、似たようなものだと考えればいいと思います。また、イズメの下に火吹竹を敷いて、揺れるようにして、中にいる子を眠らせることもありました。

イズメに入れることで、家族の者は農作業や家事に従事しやすくしていました。

こうしたイズメが使われていたのは昭和30年代までのようで、ゆりかごやベビーベッド、また歩行器などの登場により使われなくなったようです。(川波久志)



写真1 (使用地: 越前市高木町)



写真2 (使用地: 勝山市北谷町小原)



写真3 (使用地: 勝山市一本松)



写真4 (使用地: 美浜町佐田)



写真5 (使用地: 大野市上打波)



写真6 (使用地: 勝山市鹿谷町)

※この6点はいずれも当館1階オープン収蔵庫で展示しています。

## 橘家文書のうち朝倉義景判物

[法量] 縦26.8×横44.0(cm)

[時代] 弘治3年(1557)

橘家文書は福井市西木田に住む薬商人・医者橘家に伝来し、現在は当館が保管している文書群です。平成2年(1990)に中核史料を含む455点が橘家から当館に寄贈され、平成29年に残る460点も寄贈されました。加えて、平成30年に福井県立図書館所蔵の橘家文書1点が当館に移管され、総数916点が当館で保管されることとなりました。

平成30年3月には橘家文書のうち中世・近世文書を中心に554点が県指定文化財となりました。橘家文書は戦国時代以降の有力商人の変遷を示す重要な資料として評価されています。とりわけ、戦国時代において大名と結びつき城下町や領国内の経済に大きな役割を果たした有力商人(研究史上では「商人司」などと呼びます)の文書としては全国屈指のもので、注目を集めています。

橘家の本格的な活動は戦国時代に始まり、朝倉義景・織田信長・柴田勝家・丹羽長秀・堀秀政・結城秀康など歴代の錚々たる権力者から保護を得て、薬の商売・座(商人組合)の統制・医療活動などを行いました。その他、観世から口伝を受けるほどの太鼓奏者としても有名で、文化的活動も熱心でした。

今回、橘家文書の県指定を受け、そうした橘家の活動を示す文書のうち、比較的古い文書である朝倉義景判物を紹介します。

下記の写真は弘治3年(1557)10月21日付けの朝倉義景判物です。戦国時代の越前朝倉氏の当主義景か

ら橘屋三郎五郎へ宛てたものとなります。なお判物とは将軍や大名など上位の者が花押を記して発給した文書のことをさします。また、用紙の形態は古文学書では折紙おりがみといわれています。これは用紙を横に半折にして用いたもので、もとは略式の様式でしたが、戦国時代には公式の命令にも用いられるようになりました。

内容は、「橘屋の調合薬売買につき、門験(しるしのことか)の使用や薬銘に橘字を用いることは惣領(家の相続人)一人に限る」と決め、橘家の調合薬売買を認めています。当時、赤の他人が薬銘に橘字を用いた偽薬を売買することがあり、これを取り締まることもありました。また、「酒売買の座の統制も以前のように安堵する」としています。これは橘家による酒商人組合の統制を認めたものです。この他、別の文書から、朝倉氏が橘家の諸商売を安堵し、さまざまな負担を免除していたこともわかります。総じて、朝倉氏は有力商人である橘家を保護する政策をとり、橘家はその保護のもとで成長し、城下町や領国内において重要な経済的役割を果たすようになりました。

もちろん、朝倉氏以外にも、織田氏や越前松平氏に関わる文書や、医療に関わる文書など多数の資料が伝来しています。当館では現在、常設展示で橘家文書5点を取りあげて紹介していますので、ぜひ実物の資料を体感しにきてください。また、機会があれば、残りの文書も随時紹介していきたいと思えます。

(大河内勇介)



就橘屋調合薬  
売買、門験并  
薬銘橘字可限  
惣領一人、仍酒  
売買座事、如  
先々不可有相違  
状如件、  
弘治参  
十月廿一日  
(花押)

橘屋  
三郎五郎殿

# あわらし北本堂 神明神社観音堂の仏像

あわらし北本堂に位置する神明神社境内には楼閣風の立派な観音堂が聳えている。この堂内にあわらし市指定文化財 十一面観音菩薩立像とその脇を護る二天(神将)像の計三軀が祀られている。平素は秘仏のご本尊だが先年のご開帳に加え、今回当館へお出し頂いたこの機に三軀のお像について紹介してみたい。

## ① 十一面観音菩薩像の沿革

本像の伝来について、寛保3年(1743)6月18日の奥書をもつ縁起(資料⑦)から見てゆこう。養老元年(717)、白山登山中の泰澄大師が西方を眺めると、昼は紫雲たなびき、夜は光輝く場所があることに気づき、早速その場所へと赴いた。そして末世の衆生済度のため伽藍を建立し、泰澄自ら本尊十一面観音菩薩像を彫刻し、さらに四天王像を安置した。こうして紫雲山光明寺と号し、地元(堀江、岩見氏(堀江石見守のことか))は、鎮護国家の霊場として崇めた。泰澄入定(逝去)から数百年後、国は乱れて伽藍も荒らされ焼亡し、わずかに三軀の仏像のみ残されたという。こうして失われた伽藍跡地は田畑や集落となり、光明寺の本尊を安置する堂宇＝本堂に因み集落名を「本堂」としたという。その後、集落内に一字を建て、観音以下残された尊像を氏神と称し祀り、草木を植えて整備し、春秋に祭礼をおこなった。この観音には現世の諸難を除き、一切の願いを叶え、未来には安養浄土へと至るといふ当来二世の靈力が備わっていることを説く。

さらに付け加えて、元禄8年(1695)、光背・台座を再興し、寛保3年(1743)6月18日から7月中、文政7年(1824)6月11日から20日までご開帳がなされたことを付記しており、平素は秘仏であるゆえに、ご開帳が当観音像にとって最重要の行事であったことがわかる。現在も33年に一度の本開帳と17年目の中開帳が盛大におこなわれ、今日まで重要な行事として守られている。三軀の仏像は明治期の神仏分離の影響によるものか、近年まで近隣の寺院に客仏として祀られてきたが、神明神社境内に観音堂が建立されるにおよび、現在地に移されたという。

## ② 本尊 十一面観音菩薩立像

あわらし市指定文化財 平安時代(像高 176cm)

形状は、高い髻上に仏頂面を表し、天冠上および髻に菩薩面を交互二段に配し、正面に化仏を表す。天冠台は帯二条。地髪部は毛筋彫り。半眼閉口、耳朶環状不貫。三道刻出。胸の括れ一条。腰から上体をやや右に傾ける。天衣を両肩に掛ける。条帛、腰布、裳を着す。右膝を緩

め、両足を揃えて立つ。右手は垂下させ五指を伸ばし、左手は屈臂して水瓶を握る。天冠台、毛筋彫り、衣紋は前面のみ表し、後面は外形のみである。

構造は内割りの全くない一木造である。頭頂の仏面から両肩、両足柄まではほぼ一本の木で丸ごと作られる。木芯は、像中心に込め、上方は右耳後ろへぬける。彩色は、現状素地をみせるが全体に下地の白土が残り、頭髪や一部に墨を塗る。保存状態は、菩薩小面や右手先、左肘より先、天衣等が後補であり、足先が摩滅し、背面に細かい虫損がみられるが、内割りがないため細かい干割れが見られる。全体には大変良好である。

一見すると、顔が小さく、腰も括れてほっそりとして非常にスタイルがよい。顔立ち、体の括れ線、衣紋等は強調することなく浅く彫られ穏やかで優しい表現である。また、衣の表現は簡素で形式的にもみえる。しかし、詳細にみてゆくと非常に個性的で見所の多い像であることがわかる。

紙面の都合上、頭部を中心にみてゆく(写真②-1)。まず目について、通常は瞼の中を深く彫刻し、眼球を表現するが、本像では目の外形を表すのみである。下瞼に細い目のような一条の線刻が施されるが、これを当初からとすれば珍しい表現である。眉はわずかに盛り上がっている。鼻先は欠損しているが元々小さく小さめであったとみられる。口も同様に小さいが上唇を前に突き出し、唇の輪郭も抑揚がなく単純である。地髪部は毛筋を線刻により表現するが、正面を台形、その先を水平方向とするが他には見られない方向へと流す。顔全体からは厳しい表情がうっすらと浮かび上がる。

本像は全体の表現が和らいだ平安中期的様相をみせるが、細部では平安初期の靈験仏にみられる特異な表現を多く見せる古様で個性的な像であり、修験者に尊ばれた泰澄の自作伝承にも本像に関わる信仰上の含みを感じることができる。

## ③ 二天像

本尊を護る二軀の神将像である。縁起では四天王のうちの二軀のみ残ったと記されているが、顔や体の向きや口の開閉等対称的なことから当初より二天であったと考えられる。

### ③-1 広目天立像

あわらし市指定文化財 平安時代(像高 95cm)

本尊右側に安置される。形状は螺髻、疎彫り。瞋目、開口し上歯および舌を見せる。耳朶環状。着甲し、裳、袴、沓を履く。顔を左斜め下に向け、右手は筆(亡失)を持ち、左手は屈臂して五指を捻じ巻子を握る。左足は直立

し、右足は側方に膝を曲げ、足先を向け、邪鬼上に立つ。構造は、一木造、背刳あり。頭体幹部、髻から両足首まで一材。頭後ろで首下から裳背面垂下部まで含み背板を当てる(亡失)。両肩より先、両足、天衣遊離部別材(両肩以下後補)。

### ③-2 多聞天立像

あわら市指定文化財 平安時代(像高 98cm)

本尊左側に安置される。形状は単髻、頂面に山形の宝冠をつける。瞋目、閉口する。耳朶環状。着甲し、裳、袴、沓を履く。顔・上体を右に向け、右手は屈臂し掌上に宝形造堂を載せ、左手振り上げて五指を捻じ戟を執る。右足は直立し、左足は側方に膝を曲げ、足先を向け、邪鬼上に立つ。構造は、広目天とほぼ同様である。

両像とも本尊と相違し、虫損や摩滅により保存状態が極めて悪いが、一木造が幸いし、像の特色をよく残している。像全体では体側方向への大振りな動きをみせるが、斜めに向けた頭部により多角的である。ただし二軀を並べた場合、あくまで本尊をはさみ左右対称であり、それぞれの個性は表していない。腹部や下半身では奥行きが深く、重厚な印象を与える。細部をみてゆくと、表情は虫損により大きく損なわれるが、眼球を大きく見開き、鼻も大きく口廻りも立体感がある。髻は、広目天は頭頂で束ねて髻の様に持ち上げ、左右で螺旋を描く螺髻は、平安後期に多い垂髻とは異なる古様なものである。これに対し、多聞天は単髻とするが小さい山形冠がアクセントとなり、広目天と差異をつける。

以上、二天像も大ぶりの動きや下半身の重厚感等平安前期的な要素をみせるが、形式化の兆しも見せることから時代は少し下がると考えられる。また本尊像との関係について、二天像は背刳りを施すなど両者の構造が相違しているが、当初より一具であった可能性も考えられる。

### ④ 本尊 十一面観音菩薩立像 光背

木製漆箔 江戸時代(高216cm 幅102cm)

本尊像の背面全体を覆う挙身光で、周辺部は渦巻く雲で満たされる。左右で対称に33軀の半肉彫りの化仏が取り付けられているが、すべて七観音の姿で表されている。これが木板額、縁起巻から西国三十三所霊場の本尊であることがわかる。最も有名な観音霊場の像を周辺に配し、本尊の霊力を増強される観音像にふさわしい光背ともいえる。江戸時代の新しいものながら、あまり例をみない珍しい光背であり、作られた時期(元禄8年)が特定できることも貴重である。

### ⑤ 西国三十三観世音建立施主額

木板墨書 江戸時代(横幅183cm 高(現状)37cm)

上下に2枚の横板を刳いでいたと思われるが、それぞれの板の下部を失ったものを一つに合わされている。

そのため、完全ではないが大凡の内容はわかる。上の板に「西国三十三 観世音建立之施」とあることから西国三十三観音像を造立した施主を披露したものとみられる。また末尾に「元禄八乙亥」(1695)とあり記載時期がわかり重要である。この三十三観音像について、現在単体の像としては見られず、あてはまる作品は本尊光背のみであることから④本尊光背のことを指すと考えられる。また、⑦縁起巻の追記部分に元禄8年に光背・台座を再興したと記されている。さらに三十三観音を作るにあたり本堂村のみならず近隣からも寄附を得ており、広く信仰を得ていたことがわかる。これら多くの情報を得ることができる貴重な資料である。

### ⑥ 御開帳版木

江戸時代(高24.1cm 幅9cm)

ご開帳に関わる版木である。年記がないため時期は不明ながら、開帳期間は縁起にみえる文政7年(1824)の開帳期間に近い。

當八月十日ヨリ同二十日マデ 本堂村  
十一面観世音御膳米志  
開帳

### ⑦ 十一面観世音縁起

紙本墨書 江戸時代 卷子装(天地幅29.5cm)

現存する本尊十一面観音像、二天像とこれらを安置していた紫雲山光明寺、さらに開基泰澄について記される。縁起の撰述は元禄8年(1695)とされるが、追記部分の記述から筆写は文政7年(1824)以降である。氏神として祀られ、春秋の祭礼がおこなわれた江戸後期の現状から過去を付け加えた感がある。なお、本書を写し、若干のアレンジを加えた「略縁起」(近代か)1巻も附属する。



②-1 本尊 十一面観音菩薩立像 顔部分



② 十一面観音菩薩立像





㊦-1 広目天立像



③-2 多聞天立像



光背部分C



④ 十一面観音菩薩立像 光背



光背部分A



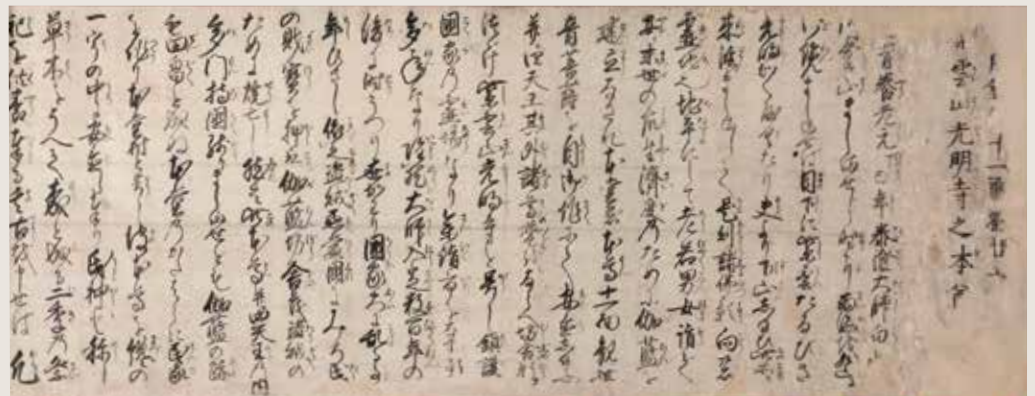
⑥ 御開帳版木



光背部分B



⑤ 西国三十三観世音建立施主額



⑦ 十一面観世音縁起(部分)

9月

- 1日(金)～10月17日(火)  
写真展「秋のまつり」(エントランスギャラリー)
- 1日(金)  
美浜町職員来館(資料調査)
- 2日(土)～10月1日(日)  
田中完一氏寄贈鉄道コレクション展  
「ダイヤグラムと時刻表」(特別展示室)
- 2日(土)～3日(日)  
鉄道模型運転会(協力:鉄道友の会福井支部)
- 5日(火)  
岐阜市歴史博物館来館(資料返却)
- 7日(木)  
京都国立博物館来館(資料返却)
- 10日(日)  
田中完一氏寄贈鉄道コレクション展  
「ダイヤグラムと時刻表」展示説明会(特別展示室)
- 13日(水)  
小松市博物館来館(資料借用)
- 14日(木)  
坂井市教育委員会来館(資料調査)
- 22日(金)  
博物館運営協議会(研修室)
- 23日(土)  
鯖江市教育委員会来館(資料借用)
- 30日(土)  
ふくい歴博講座「官僚柳田國男、福井に来る」  
福井市橘曙覧記念館来館(資料借用)

10月

- 10日(火)  
美浜町職員来館(資料調査)
- 26日(木)  
大野市博物館来館(資料調査)
- 21日(土)～11月26日(日)  
特別展 白山開山1300年記念「泰澄－白山  
信仰における意義を探る－」(特別展示室)
- 21日(土)～12月12日(火)  
「白山周辺のまつり－白山信仰の祭礼と能面を  
めぐって－」(エントランスギャラリー)
- 22日(日)  
特別展 白山開山1300年記念「泰澄－白山信仰  
における意義を探る－」展示説明会(特別展示室)
- 29日(日)  
キッズミュージアム「懸仏(かけぼとけ)をつくろう!」

11月

- 5日(日)  
歴博移動講座「近江にて泰澄ゆかりの地と観  
音信仰をめぐる」
- 6日(月)  
福井県博物館協議会理事会・総会(研修室)
- 18日(土)  
ふくい歴博講座「『泰澄和尚伝記』の泰澄・伝記  
以外の泰澄」(研修室)
- 19日(日)  
「泰澄に捧げるお茶会」(エントランスロビー)
- 24日(金)  
鳥取県立博物館来館(視察)
- 29日(水)  
福井市橘曙覧記念館来館(資料返却)
- 30日(木)  
石川県立歴史博物館来館(資料調査)
- 30日(木)～12月2日(土)  
収蔵資料燻蒸(燻蒸室)

12月

- 2日(土)  
越前市教育委員会来館(資料借用)
- 4日(月)  
南越前町教育委員会来館(資料調査)
- 5日(火)～8日(金)  
ふれあい文化子どもスクール来館
- 8日(金)  
東京大学史料編纂所来館(資料調査)
- 12日(火)  
福井県立若狭歴史博物館来館(資料借用)
- 14日(木)～2月27日(火)  
「干支の郷土玩具とレトロ年賀状」(特別展示室)
- 27日(水)～1月2日(火)  
年末年始休館

1月

- 3日(水)～2月27日(火)  
企画展「ふくいの子供のお祝い」(特別展示室)
- 7日(日)  
企画展「ふくいの子供のお祝い」展示説明会
- 14日(日)  
キッズミュージアム「ジョンくん(犬)のペー  
パークラフトを作ろう!」(研修室)
- 20日(土)  
ふくい歴博講座「越前と加賀の小型石造狛犬」
- 26日(金)  
福井県博物館協議会実務者研修(研修室)

2月

- 6日(火)  
大雪のため、開館時間短縮  
(午前10時30分～午後5時)
- 7日(水)～9日(金)  
大雪のため、臨時休館
- 10日(土)～12日(月)  
大雪のため、開館時間短縮  
(午前10時～午後4時)
- 13日(火)  
大雪のため、開館時間短縮  
(午前9時～午後3時)
- 18日(日)  
企画展「ふくいの子供のお祝い」展示説明会  
大雪の影響で「如月の茶会」中止
- 22日(木)  
福井市郷土歴史博物館来館(資料借用)
- 22日(木)  
鳥取市博物館来館(視察)

3月

- 1日(木)～5月22日(火)  
「ふくいの近代化遺産」(エントランスギャラリー)
- 8日(木)  
博物館運営協議会(研修室)
- 12日(月)～16日(金)  
メンテナンス及び常設展示更新のため、休館
- 19日(月)  
越前古窯博物館来館(資料借用)
- 23日(金)  
越前市武生公会堂記念館来館(資料返却)  
敦賀市博物館来館(資料運搬)
- 24日(土)～5月20日(日)  
幕末明治福井150年事業企画展「福井が生んだ写真師  
丸木利陽 御用写真師が撮らえた明治人」(特別展示室)
- 29日(木)  
福井県立若狭歴史博物館来館(資料返却)